

# 東京 見聞録



## 今月の炬火

### 杉本 光生氏

インベスター・ネットワークス  
代表取締役社長

間接金融から直接金融の時代になり、IRは上場企業の盛衰を左右する中枢的な活動になった。そのIR活動を支援する数少ない専門企業の一つがインベスター・ネットワークス。他に先駆けて開発した「IRnavi」のユーザーはすでに二〇〇社を突破し、リニューアルして発売した「プレミアム優待倶楽部」の出足もすこぶる好調とか。次なる飛躍を誓う杉本社長に聞いてみた。

杉本社長はインベスター・ネットワークスの創業者である。大学卒業後、リクルートコスモスに入社した杉本氏は、不動産バブルを体験。その後人材派遣大手のインテリジェンス、日本初のIR専門会社であるIRジャパンに転職し、日本の企業の消長を目の当たりにしてきた。

「強烈な思い出は、一九九七年の北海道拓殖銀行、九八年の日本長期信用銀行など、当時の有力な金融機関の破綻で、銀行の『不倒神話』が崩れ去る様子を目の当たりにした」という。IRの業務支援を担当していた同氏は、当時を振り返り、「企業は株主や投資家よりも、メインバンクとの関係を重視して、株式の持ち合い、もたれ合いが当たり前でした。これが銀行の破綻によって終わり、それに代わって投資家、とりわけ外国

人が台頭してきました。確か、九〇年代末頃は、大手企業の外国人持株比率が二桁になったというニュースをしきりに聞いた」。そんな報道が増えた結果、「著名な会社から、『うちの株を買っていいところを教えてください』という依頼が増えてきた」という。

実はその前の八九年に小糸製作所の株が「乗っ取り屋」として知られていたピケンズ氏に買い占められ、トヨタを抜いて筆頭株主に躍り出た。彼は株式持ち合いによる日本の閉鎖性(系列)を非難し、持ち株(出資)比率二〇%未満の親会社(トヨタ)が系列企業の小糸製作所を支配するのは不当として、政治的に「日米経済問題」へ発展させることをネタに、取得した株をトヨタに高値で買い取らせようと画策。小糸製作所対ピケンズの長い法廷闘争が繰り広げられ